

看護師の適性開発と教育・キャリアシステムの再構築に関する研究

氏 名 新田 美佳

指導教員 工藤 一成

要旨

高齢社会が到来し、日本の財政における医療費の占める割合が増大していることが問題となって久しい。医療機関の経営という視点では、急性期病院は診療報酬の改定に伴う対応に追われつつ、人材の確保の面からも問題を抱えている。本論文では看護師である筆者の視点で人材の育成や確保を論じている。医療は年々高度化しており、看護師に求められる知識や技術は高度化し、質的にも多様化している。その一方で、看護師の離職率は高く、看護人材の不足は慢性化しており、人材不足のなかで就労する看護師は疲弊していくという負のスパイラルが進んでいる状態である。

少子化による労働力不足が顕在化したため、政府による「働き方改革」が進められ、これまでの働き方を見直すことは業種を問わず大きな課題となっており、時間外労働や有給休暇などの労働環境に関する問題に対して、組織を挙げての対応をしている。それらは、労働力の確保・労働生産性の向上などを期待しての取り組みである。日本看護協会においても、「看護職の働き方改革」を進めており、夜勤・時間外労働・賃金などに関するガイドラインなどの作成に取り組み、ワークライフバランスの実現を目指している。

しかし、これらの制度や慣行の見直しにもかかわらず、看護師として働いている筆者にとって、看護師の働きにくさは解消が困難な問題であると感じており、その原因は「向いていない」という言葉で表現されるような看護師の内面から湧き出るもの、つまり主観としての「適性」に関するものであると実感している。本研究において看護師の仕事を整理し、多方面の先行研究を分析し、看護・介護事業の経営者によるヒアリングや、自らの経験を含めて主観的な適性に含まれる問題を整理することを試みたうえで、本学で学んだマネジメントの考え方や方法を用いて、解決への糸口を探してみたいと考えた。

看護師として働く当事者としての自らが、成長しながら働き続けられる環境を作ること、看護師の働き方だけでなく、女性が社会で活躍する働き方を提案できるのではないかと感じている。そして、男女の性差を超えて、人生に幸せを感じながら活躍できるような社会づくりの第1歩として考えていきたい。